# 恋愛行進条約

後藤彩美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛行進条約

【Ｎコード】
Ｎ７５５８Ｐ

【作者名】
後藤彩美

【あらすじ】
これは、実際作者が体験した、恋愛ストーリーです。名前など一部ノンフィクションがございます。

# プロローグ

死ぬもの狂いで勉強して
無事に受かった関西大学高等学校に
あたしは入学する。

家から2時間かかるけれど…
好きで入ったもん。
なにせ制服がかわいくて！！
ピンクのりぼんに紺のブレザー
青と水色のチェックのスカート
若干普通に見えるけど、私が
気に入ってるのはピンクのりぼん！！

「んーっ、いい匂い」

私は新しい制服を着用して
細長い鏡にてチェックをする

明日からやっと着れるのね

あたしは芦屋那南海（あしやななみ）。
趣味は常に食べること（笑）
え、まじめに答えろって？？
あたし的にまじめな答えなんだけど…

カラオケとダーツと、ボーリング

所謂、体動かすことが好き！！
でも最近怠けてるから、
お腹出てオバチャン体型…。

え、恋愛？
言わなあかんの？

「あの娘だよね？」

「あ……うん…」

「告白しまくって、まじ何様のつもりなわけ？？自分モテてるとでも？」

「ちょ、あやね、声大きいって！！」

「聞こえるように言ってんじゃん！！」

そう、中学当時、あたしは
告白しまくり女ということで
噂が広まってか、友達1人もいなかった
唯一、3年間同じクラスだった
植田昴くんだけだった
昴くんと一緒にいるとこを
見られると軽蔑される。
みんなの怖い視線に見守られながら
あたしは無事昴くんのおかげで
中学校を卒業することができた。

まさかホントにあたしが
告白しまくってるって思ってる？
気が多いのは確か。
でも人を好きになって何が悪いの？

『あの人のこういうとこが好きっ』

どうしてそれが恋につなげようとするの？

つなげようとする人たちがわからない
『恋』っていったいなんなのか、
今のあたしには理解できなかった…

そう、高校入学する手前までは……。

## 同棲生活のはじまり

「実は……おまえに話しあって来た」

「えっ？」

「今日からお前と一緒に暮らす！」

入学してちょうど1週間が経った頃だった。

家路に着いたすきに、
突然聞きなれた声がしたかと思えば、
すごい真剣な視線をあたしに映す。

どれくらい沈黙が続いただろうか。

島本裕太
あたしの幼なじみ。
中学校はなぜか違ったけど…
幼稚園から小学校まで
ずっと同じクラスで
ずっと一緒に過ごしてきた

確かに、幼稚園年長さんの頃、
裕太、真っ赤になりながら

「い、い、いっしょに、屋根の下でずっと、いっしょに……く、くらそう！」

クスッ（笑）
あの時の裕太、異常に
かわいかったんだよなぁ。
「何、笑ってんだよ」
は
あたしは我に返る。
「ご、ごめん…。昔の裕太、思い出しちゃって…はは…」
えっ?!
何らか吸い込まれるように、
あたしの腕が引っ張られ
裕太の胸に当たり、
抱き締められる形になる。
「俺…本気でななみのこと好きなんだよ!幼稚園からずっと…」
「…っ!」
「…やっと、俺の夢が叶ったんだな」
裕太……
「あたしだって、好きだよ。でも…」
!!

ぎゅうっと強く抱き締められて
いくのがわかる
まるで、これ以上言うことを
否定するかのように……
そう、あたしは…
岸沢克哉くんという恋人がいる。

それを知っているかのように…

「じゃあ俺、荷物とりに行ってくるから」
とあたしから離れ、元来た方向へと
自宅に戻っていった。

その場にポツンと取り残されたあたし…
しばらく動けずにいた。

## 同棲生活のはじまり（後書き）

克哉くんと出会ったのは、入学式の日。
なんか異様に視線感じるなぁと思って、その視線を追った矢先が克哉くんだった。
何かを伝えたがってるような目だった。それがきっかけで一目惚れしたんだけど…当時、彼女いたんだよね。その彼女は西村朱希ちゃん。髪は黒でストレートのロング、あたしがうらやむほど目がクリクリしてて可愛い女の子！
彼女がいては、あたしはどうすることもできなかった…。その2人を見るたびに胸はズキズキと痛むし、急に食欲失せるし、いっそのこと死ぬことしか考えていなかった……。周りなんて見えなかった。友情関係さえ、崩れ陥ってしまった。

月日は流れ、半年が経ったある日のこと、もうみんなにはグループができてしまってて大方諦めていたあたしに天使が舞い降りた。

あたしも入れるグループがあったのだ。

そして、あの衝撃的な出来事が起こった。
でも奇跡的に裕太は、その時は欠席だった

「なによ……。…どいっ！ひどい！あたしと付き合う前から芦屋さんのこと好きだったなんて。あたしのこと弄んでたのね…」

「ちげぇーよ。あきのことはほんまに…」
「もういい！！」
「聞けって！」

「なによ？」

「わかんなかったんだよ、あいつのことが…。」
「わかんない？自分の気持ちでしょ。なにがわかんないの？あたしの方が意味わかんないよ」
と言い残して、教室を飛び出した。

彼女と喧嘩別れしたにも関わらず、克哉くん、その場であたしに告白したんだよね。

もしかしたら、裕太は知ってるのかな？
知ってて同棲しようとした……

あたしは首を横に振る。

同棲は克哉くんと出会う前のことー。

## シークレット

裕太は知らないんだから……

（翌朝）

「…んだよ、それ。どうして俺に黙ってんだよ！」

「ち、ちがうの！」

「……、何が違うんだよ？」

「……」

「なに黙ってんだよ。あーそーか！俺に言えないんだな。もうええわ！！ばいばい」

飛び起きる。

「あ、ちょ待って……」

あ……

夢かー。

あたしは大きくため息をついた。

克哉くんに、今のうちに言った方がいいのかな？

首をぶんぶん振る。

言わない方がいい。
なんとしてでもこの同棲を隠さねば

でも裕太になんて言お

そう考えながら階段を降り
居間に向かう。

「あ、おはよう！」
「あ、うん…おはよう。裕太朝早いねー。お母さんは？…まだ寝てるのかな？」
とあたしは来た方向へと、
向きを変えると、いきなり裕太の手が
あたしの前にあらわれ、包まれる。

「お母さん達…いないよ。俺の家に引っ越したから。それともなに、俺と2人っきりになるのが嫌？」

裕太の声はあたしの耳元に当たるので
きっとあたしの顔は
真っ赤になってるはずだ。

「…いや…では、ないです…」

なぜか敬語で話してしまった

「ずっと…。いやしばらくこうしててていいか？」

「うん……」
あ、
今だ、言わなきゃ！

「ねぇ裕太、登校する時とか学校いる間はなるべく離れていようね」

そうしないと
裕太と長くいちゃうと
克哉くんに変に思われる。

きっと裕太は同意してくれる
いつものようにいようって

しかし、次に跳ね返ってくる言葉が
そうではなかった

「……なんで？」

えっ？

とっさに裕太は、
あたしから離れる。

「別にいつも通りなわけやん？俺ら、家近いことだし、同棲してることなんてバレないって！」

「……でも…」

「大丈夫だって！もしバレたとしても、俺学校やめてお前のためにこれからのために働く覚悟できてるからさ」
と、眩しい笑顔をあたしに見せた。

「さ、飯食おうぜ。初の同棲記念日に俺が作ったんだー。俺の卵焼きはちょっと癖があるんだけど、スーパーやどこにも売ってないからさ（笑）」

「…はは…どんな味だろー？あたし卵焼き大好きなんだぁ」

もう悩んでても仕方ない

「あ、美味しい！！！」

「まじ？よかったー。初の同棲記念に、初の卵焼き。まずいわけがない！」

「裕太、それは言い過ぎでしょー」

（笑）

あたしたちの笑いは部屋中響いた。

これからプラス思考に
生きていくんだ！

（数分後）

「あ、裕太ー。そろそろ出ないと遅れちゃうよー」

時計は５時２５分を指していた。

「ほんとだ！皿洗いは帰ってからにしてと、元栓…オッケ……」と裕太は火事にならないように、あちこちチェックをしていた。

何もかも支度を済ましていた
あたしは下駄箱で突っ立っていた

その時！

「～♪♪♪♪…♪～」

！！！

克哉くんからの着信だった。

まだ裕太は来ていないことを
確認し、外に出て着信に出た。

「……もしもし…」

あたしは裕太に聞こえないように
か細い声でしゃべる

「どうしたの？」

「え、どうしたって……。俺がかけてきたら何かまずいことでもあったか？」

ドキッ

一瞬心臓に釘が刺さった

「な、なにもないよ…ただ…今から出ようとしたから、ちょっと…び、びびっただけなの」

「…そうか。」

あたしはちょっとずつ、
自宅から遠のいていくように歩き出す

「今から出るなら、あれか。越部５０分発の乗るんやんな？」

！！

「う、うん…」

忘れてた…
克哉くんは福神駅
間違いなく５０分の乗れば
逢ってしまう。

なんとしてでもずらさなきゃ

「じゃあ、３両目の後ろの方に乗っといて」

「……わかった…」
「じゃあな、福神駅で」
「うん。ばいばーい」

プチ
通話終了ボタンを押す

「…だれ？」

！！！

後ろから冷たい声が聞こえ、
あたしは慌てて振り返る。
冷酷とした顔があたしの目に飛びうつる

裕太…。

いつの間に来てたの？

「……だれと話してたの？」

「と、友達だよ」
っ！

突然抱き締められる。
その圧力は昨日とは違う感じ

「い、痛いよ！裕太…」

「ほんとに友達なんだよな？」

「うん、ほんとだって！」

また突然離れた。

「はよ行こう！学校遅れる！」

さっきの冷酷とした顔とは違い、
元の裕太に戻る。

でもあたしの心の中は
まだ沈んだまま…

あたしは大切な人2人に
嘘ついてしまったのだから

**葛藤**

８時３５分ー。

ギリギリ学校到着。

なんとか上手く、克哉くんに
見つからずにすんだことに一安心…
のもつかの間

「あれ？ななみ？」

背後から聞きなれたような声

「ななみ、どうした？」

裕太はその声に聞こえてないようだ。
あたしは裕太から少し距離を
とろうとするが、

「なんで離れんの？俺たちいつもとおんなじだよね？」
とあたしに近づいてくる。

あ、そっか。

いつもと一緒…
裕太はただの幼なじみ

「ななみ？」

「わ！！」

あたしの前に克哉くんの顔が現れる。

「おはよう！」

とキラキラとした笑顔で挨拶する

怒って…

ないのかな？

「……こいつ、だれ？」

「えっ？」

裕太の方を振り向くと、

またもや冷たい目…

そして、あたしから視線を外し

克哉くんの方を睨み付ける。

「あ、俺？俺は岸沢克哉。ななみの…」

「あああああああーッ！！」

克哉くんが平然と答える途中

あたしは大声で叫んだ。

「もう朝礼はじまるー！裕太行こう！」

と裕太の腕をとると、
すぐに思いっきり振り払った

「え？…」

そのまま、裕太は一目散に
走っていった。

取り残されたあたしと克哉くん

「…おまえ、どうゆうことだよ？」

！

突然スイッチが入ったかのように
とうとう克哉くんは怒りだしてしまった

「なんでおまえ、あいつのこと呼び捨てして俺は呼び捨てじゃねぇんだよ！！おまえ、あいつとどんな関係なんだよ！」

あたしの両肩を掴み、突っかかる

「なぁー！！！！」

「…んな、どんな関係って…。裕太はあたしの幼なじみなの」

その時！

遠くからだれかが
あたしの名前を呼ぶ声が聞こえる。

そのおかげか、
掴まれた肩に克哉くんの手が離れ、
彼は冷静に戻る

「…まぁ、今回のことは棚に流すとして…。次、またおなじことあったら、その時は……まー覚えておけよ。じゃ、また連絡するから」
と言い去った。

あたしは大きくため息をついた

やっぱり言った方がいいのかな？

ぶんぶん首を横に振る。

ダメだよ！
そんな正直に言ったら……

「次、またおなじことあったらそん時は覚えておけよ…」

脳裏に克哉くんの言葉が浮かぶ。

克哉くんは怒らせたら
めちゃめちゃ怖い

見たでしょ！
克哉くんと西村さんの修羅場！

もしかしたら殺されるかもしれない…

「なーちゃん？」

あ…。

あたしの顔面に現れ、
ふと我に返る。

「どーしたの？なーちゃん…顔真っ青よ？」

心配そうにあたしの顔をじっと見る

あたしは笑顔を作った。

「だ、だ、だぁいじょーぶ！」

「ほんと？」

「うん」

「よかったぁー。なーちゃんは、あさの親友だからー」
とあたしの肩をポンと叩いた。

親友…

そう

ちょうど友情関係が乱れて1週間、
教室移動の時、声かけてくれた

名前は坂上亜沙美(サカノウエアサミ)
みんなのマドンナと呼ばれていて
あたしも唯一憧れてた女の子

髪は黒のセミロングで
目はぱっちり、
いつも歯を見せて笑っている

そんな子があたしの親友だと
言ってくれた

学校もその子のおかげで
毎日が楽しい。

ずっと…
卒業してからもずっと…

この関係築いていけたらな!

「またなーちゃん、ボーッとしてる」
「えっ」

ハッと我に返る。

「なんか隠し事してなーい?」

とあたしの顔を覗き込む。

「し…してないよ」

「ウソ」

「へ？」

あさちゃんに何か見透かされたかと
思い、一瞬ドキッとする

まさか…

「へ？じゃないよ。かっちゃんと付き合ってんでしょ」

「え、」

あ、そっちか。

そうだよね
裕太と同棲してることは
だれも知らない

そう、だれも……

「だーかーらぁー！あさ、さっき見たんだから。なーちゃん、克哉くんと居てたもん。もうすっかりラブラブなんだからぁ」
と言って、あたしの背中を
ボンッと軽く押す。

「さぁー行きましょかー」

「えっ、行くって…どこへ？」

あたしは訳が分からぬまま…
オドオドとするばかり

あさちゃんはいつの間にか
１０センチ離れていた

「なーちゃん！！そこ、絶対動いちゃだめだよー！」

声だけが伝わってくる。

待ってろって…
もう朝礼はじまるのに

！！！

上から痛い視線を感じ、見上げる

「ーっ！！」

裕太？

「えぇぇぇぇ！！まじ？」

「う、うん…」

「確かに麻衣、裕太のこと小学校からずっと好きだったもんなぁ！」

！！

突然、胸の痛みが走る。

あの視線は恐らく裕太に違いない

どうして？

「大丈夫だよ！麻衣なら絶対オッケーだって！大丈夫！！」

「絶対ってことはないけど…」

「麻衣は性格も見た目もばっちしなんだからさ。これで振る方がおかしいよー」

こんなに痛むことないじゃん

裕太はただの幼なじみ！

同棲なんて裕太の願望

あたしには克哉くんがいる。

裕太を好きって思える子がいて

よかった……

……あれ…

なんかあたし…

眠くなっちゃった……

遠くからさけぶ声が聞こえる

裕太？

その場にあたしは倒れ込んでしまった

## 不思議な国

「ん？…」

目を覚ますと、
今まで見たことない
景色が一面に広がっている。

だれもいない

あたし…どうしたの？
どうしてだれもいないの？

まさかあたし…

死んじゃったの？

あ

そっかぁ

あたし倒れて……

あれ？
あれれ？

死ぬほどの重い病気
抱えてたの？

……

わかんない…

でもあたし、ほんと最後の
最後まで最低だった。
裕太と克哉くん2人にウソ付いて…

ごめんね…

いつの間にか、目に溜まっていた
涙が一滴、頬につたう。

あたしが先に逝って
ごめんなさい…

えっ？

遥か遠方からかすかに
さけぶ声が聞こえる

「ほら、行きなさい」

え？

後ろを振り向くと、
モデルさんのようなスタイルで
黒のストレートロング

「お、お姉ちゃん？」

あたしが3才の頃、
学校の帰り交通事故に遭ったらしい
跳ねた車が少し大きい車だったから
すぐ病院に運ばれたけど…即死

まだ中学校迎えたばかりなのに…

3才のあたしは何がなんだか
さっぱりわからなかったけれど
中学生になって親が話してくれた

「もうこんなに身長も伸びて…。あたしは一生背も伸びないし、一生年もとらない。だけど、ななみ、あなたは違う！たくさん恋愛して時には失恋して、ごはんいっぱい食べて、楽しい人生を送るのよ！」

「…でも……」

「お姉ちゃんはずっとあなたを見守っているから。ほんと見守るし

かできないけど」

お姉ちゃんの目に、
うっすら輝いてるものが見えた。

ひょっとして泣いてる？

「お姉ちゃん！」

「なに？」

「お姉ちゃんの夢ってなに？」

「夢かぁ。モデルかなぁー。どうして？」

「じゃあ、お姉ちゃんの夢叶えてあげるよ」

「え、どうゆうこと？」

「…あたしがモデルなるよ！」

「ななみ？」

「あたし…がんばるよ。がんばって生きるよ！お姉ちゃんの分までがんばる」
と言うと、お姉ちゃんは
あたしに近づいていき、頭に手をおいた

「…ありがとう……。ななみが妹でほんとよかったー」

！！！！

お姉ちゃん…

あたしは抱きついた。

お姉ちゃん、
がんばるからね！

『ーっ、ななみー』
あたしを呼ぶ声が聞こえる。

ふと、お姉ちゃんは
あたしから離れる

「ほらもう行きなさい。ここはななみの居場所じゃないでしょう！」

「……でも…」

もう…、会えないの？…

心の中で思ってることが
言い出せない…

「…でもじゃないでしょう！もうさっき言ったこと忘れたの？」

黙っていると、お姉ちゃんは
続けて次の言葉を吐いた
「…また会えるから」
！！

「お姉ちゃん！！」
あたしはまた涙が溢れた。

「じゃあね、ばいばい」
「……ば、ばい…ばい…」
言葉が詰まる

涙が止まらない

お姉ちゃんは、笑顔で
姿を消していく

姿が消えてもあたしは
しばらく動けなかった

「…ありがとう！」

## 不思議な国（後書き）

ここで芦屋家紹介！（笑）

父…幸助
母…美希
姉…奈穂子
自分…那南海
弟…翔太
妹…愛桜

今後もよろしくお願いしま～す。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7558p/

---

恋愛行進条約

2011年10月8日11時46分発行